

渡名喜島紀行

プロローグ

渡名喜（となき）島は沖縄本島から西へ約六十キロのところにある小さな島である。北に粟国島、西に久米島、南東に慶良間諸島がある。那覇の泊港と久米島を結んでいる久米商船のフェリーが毎日午前中、上下一便この島に立ち寄る。泊港と渡名喜島間は往復割引で五千二百三十円だ。

島の面積は普天間基地や私のところよりせまい三・五平方キロしかない。沖縄県で最小の島である。しかし渡名喜村というれっきとした一つの村を構成し、村長と村議

会議員六名を擁している。

わたしがこの島のことを知ったのは、偶然と言えば偶然、必然と言えば必然と言える。山梨の冬は寒い。とくに一月から二月にかけての大寒のころの朝方は、しばし



ば零下五度近くになる。寒冷地の方々から見れば、そのぐらいで寒いなどは軟弱だと言われるそうだが、老いた身にはこたえる。若い頃は寒中でも素足で平気で外出していたが、いまは身動きが取れないほど着ぶくれて、こたつで丸くなっている。

年を取ると体をめぐっている毛細血管の数が減ってくるのだそう。六十歳になるとピーク時の60パーセントに減ってしまうという。細い血管は詰まったり、血が滞ったりして、手足の末端にまで十分な血液がめぐらない。だから年寄りには寒さに弱いのだ。

どこか暖かい南の島へでも行ってのんびり過ごしたいなど思っていた時に、ネットサーフィンで見つけたのが渡名喜島である。

「何もしないことができる島」というキャッチコピーが、何もしたくない私のところをくすぐった。観光地化した沖縄にはいまさら魅力を感じないし、海に潜るわけでもない。「あなただけの穏やかな時間がここにはある」というのが気に入った。

気象庁の天気予報を見ると、一から二月にかけての最高気温は25℃の夏日もあるほどで、半袖のシャツで十分過ごせる。コロナで塩漬けになっていた航空会社のマイルがたまっており、羽田から那覇往復のチケットは現金を出さずに入手することができた。

アシの確保の次はヤドの確保である。島にはリゾート感あふれる旅館やホテルはない。数件の民宿があるだけだ。村役場のホームペ

ージに載っていた「ふくぎ屋」に泊まることにした。一軒の民家をそっくりそのまま使えるのが魅力的だ。

話は飛ぶが、わたしは「男はつらいよ」のシリーズの中では、浅丘ルリ子演じるリリーがマドンナとして登場する「ハイビスカスの花」が一番好きだ。リリーはどさまわりの売れない歌手。沖縄で病に倒れたりリリーから「一目逢いたい」という手紙をもらった寅さんは、押っ取り刀で沖縄に駆け付け、懸命に看病する。その甲斐あってリリーは退院、二人は小さな家を借りて同棲を始める。

ふくぎ屋が貸し出す一軒家の写真を見ると、寅さんとリリーが暮らした家によく似ていた。首里城の屋根と同じような赤瓦と深く張



り出した軒がいかにも沖縄地方らしい風情だ。

リリーほどの素敵な女性と一緒に

なら胸がときめくが、血圧上昇が気になる老いの身である。ときめき過ぎて血圧が上がり、心筋梗塞でも起こしかねないので、読みかけの文庫本一冊を相方にするにしました。

島に上陸

「島が見える」という船客の声で、デッキに出てみる気になった。透明度の高い群青色の海の向こうに横たわっている島は、右端と左端に小高い山があり、緑に覆われている。山と山の間には海面よりわずかに高い平坦地があり、そこにたぐさんの家並が見える。

頬にあたる風がなま暖かいのに気づいた。まるで初夏の風のようにだ。もうすでに荷物をまとめて下船準備を整えた島人らしき爺さん

に「きれいな海ですね」と声をかけてみた。

「潜りに来る連中はトナキブルーと呼んでるよ。ウミガメが一年中みられるし、今の時期はクジラも泳いでいる」

那覇に住んでいる息子夫婦を訪ねた帰りだという爺さんは、目を細めながら島の方を眺めている。

「家が密集している辺りは海とあまり高さが変わりませんね」

「両脇の高いところは、昔は別々の島だったらしい。長い年月を経て間に砂が積もって、島と島がつながっていまのような一つの島になったようだ」

「そうするとサンゴ礁の上に家が建っているようなものですね。波が集落に押し寄せせることはないんですか」

「この船みたいな大きな船が入れるように港を掘り下げた時に、その土砂を海岸あたりの埋め立てに使ったし、防波堤を二重三重に築いたから、いまは大丈夫だよ」

爺さんはおそらくわたしと同じぐらいの歳だと思うが、黒光りした顔に刻まれたしわが深い。

デッキの手すりにもたれて爺さんと話をしていると、あつという間に船は港に接岸した。下船口に十人ほどの乗客が集まってきたが、観光客らしき風体の乗客はわたしひとりのようだ。残りは島の住民といかにも仕事でやってきたと思われる作業服姿や背広姿の乗客が半々といったところか。

港には赤瓦の宿ふくぎ屋のハエバルさんが迎えに来ていた。小太りの中年男性である。いわゆる立



渡名喜港。周辺にフェリーターミナル、役場、観光協会などが固まってある

体的で濃い顔をしている。
「いらっっしゃい。宿までは歩いて
もすぐですが、お荷物もあるでし



福木島となき社長・南風原豊さん

ようから迎えに来ました。どうぞ
車に乗ってください」
「この島のお生まれですか」
「そうです。しかし島には働く場
所がなかったので沖縄本島で仕事
をしていました。五年ほど前にい
わゆるリターンで島に戻ってきま
した。家族はまだ本島にいます」
ハエバルは南風原と書くのだそ
うだ。私には珍しい名前だが、渡
名喜島では五人に一人程度はハエ

バルだという。南風原さんは株式
会社・福木島となきの社長さん。
観光業に従事している数少ない島
民の一人だ。住む人がいなくなっ
た古民家を再生した伝統的な赤瓦
古民家六棟、食堂一棟を運営し、
地域活性化や伝統的な町並みの保
存にも取り組んでいるという。

「舗装道路は島を取り巻く環状道
路だけで、村の中は未舗装の白砂
の道です。道の両脇の木がフクギ
で、強い風から家屋を守るために
植えられています」

軽自動車がやっと通れる二間ほ
どの細い道を、人が歩くよりもゆ
っくり走り、五分ほどで宿の前に
着いた。赤瓦の平屋である。軒を
深く張り出し、柱で支えている。
屋根の勾配は強い風を考慮して緩
やかである。

赤瓦の屋根が美しく感じるのは色だけではない。平らな瓦を並べた本土の屋根と違って、丸く山型になっているところとその間の平らなところの凹凸がある。この凹凸が屋根を美しく見せているのに気づいた。

瓦を葺く際には、まず平らな女瓦を並べて、その左右の継ぎ目を覆うように丸い山形の男瓦を被せ、台風などの強風にも耐えるように瓦どうしの隙間を漆喰で塗り固める。このため、赤瓦を用いた屋根は、瓦の赤と漆喰の白とのコントラストが際だつ。それも屋根を美しく見せるひとつの要因なのではないだろうか。

男瓦は太陽の光が当たりやすく高温になるが、平らな女瓦は強い日差しを避けて屋根裏の温度上昇



をやわらげる工夫なのだそうだ。また瓦は呼吸していると言われる。水分を吸収したり吐き出したりすることにより、室内の温度調整の

役割も果たすことができる。

「食事は隣のふくぎ食堂でお願いします。朝は七時から、夕食は六時からです。出かけるときは窓は閉めてください。猫が入りこみますから」

南風原さんは私の荷物を軒下に置くといってしまった。戸締まりはドロボウのためではなく、猫のためというのがひなびた島らしい。

民宿ふくぎ屋

さっそく中に入ってくつろぐうとしたのだが、一見して玄関らしきものがない。白い洗濯機の向こう側、左端にほかと比べて新しい扉がある。その扉を開けてみて理由がわかった。

その部分は、かつては土間だったのだ。その土間に隣の部屋と同

じ高さの床を張ったので、吐き出しの出入り口が茶室のにじり口のような形になってしまったのだ。

だからここは玄関ではなく、あくまでも台所の入り口である。

私の生家は農家だったが、かまどがある台所は土間だった。井戸からバケツで水をくんできたり、かまどに薪をくべたりするには土間でなければならぬ。しかし水道ができてガスコンロがやってくると、台所の土間は板の間になった。

後に南風原さんに聞いてみたが、渡名喜島の古い民家には玄関がもともなかったそうだ。家主も客人も、縁側から出入りするのが一般的だったらしい。縁側には出入りに便利なように長細い踏み石が置いてある。

間取りは押し入れが付いた八畳のたたみの間と六畳の板の間、それに台所が一行に並んでいてきわめて開放的だ。わたしがお茶を飲んだり寝起きに使ったりしたのは左の写真の奥に見える八畳の畳の



奥の八畳間はエアコン付き

間だ。

写真手前の板の間には洋服ダンスがあったから、もっぱら荷物置き場と着替えなどに使った。板の間の隣は土間を改造した台所。水道が引いてあり、冷蔵庫と電気湯



台所には流し、冷蔵庫、電気ポット

沸かし器があった。

台所の脇にはトイレとバスタブが付いた小さなユニットバスがあった。これは民宿用として改築したときに付け加えられたものだろう。六軒ある民宿のうち、バスタブがあるのはこの一軒だけだという。

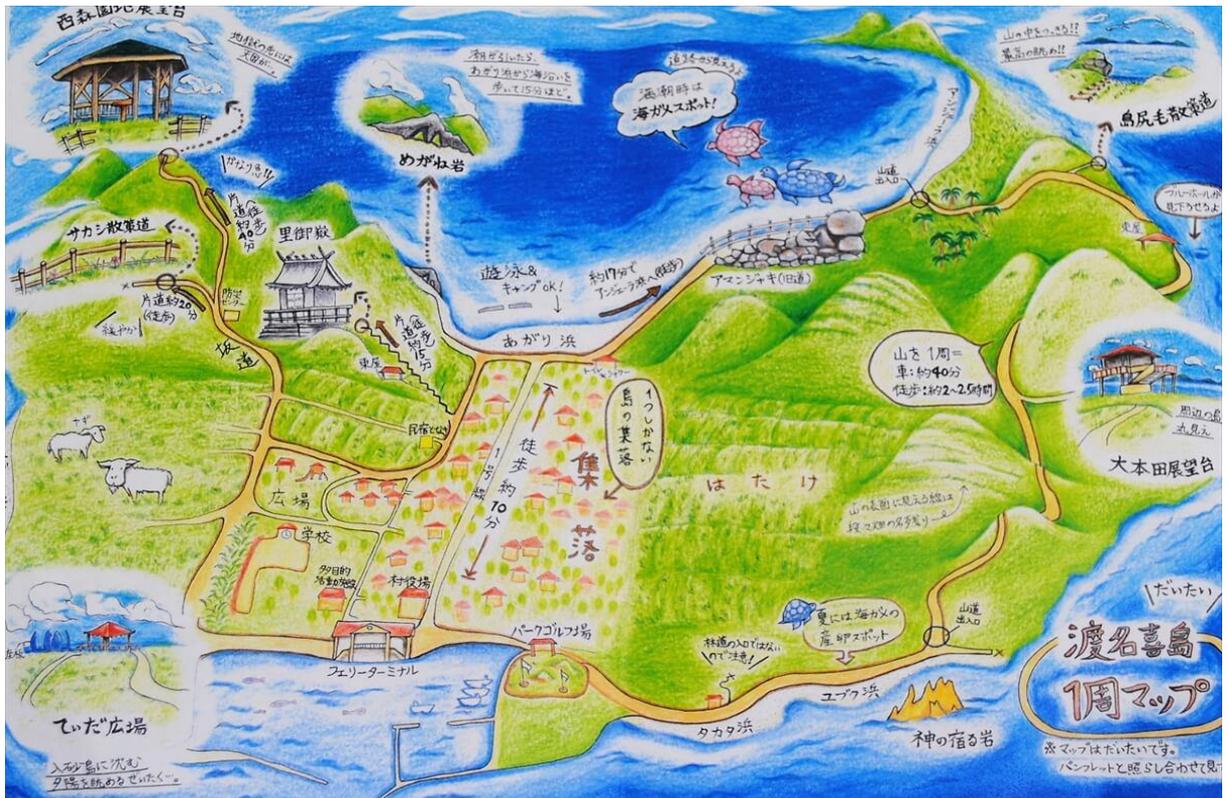
電話で予約したときには、トイレとシャワーは共同で、母屋の外だと聞いていた。夜中に何回もトイレに通う老いの身にはつらいと思っていたが、南風原さんがわたしの歳を聞いて配慮してくれたのだらう。

膝や腰が悪い年寄りには、たたみにべったりと座るのがつらい。椅子のようなものがないのが残念だが、敷き布団を丸めて椅子代わりにしてしのぐことにした。

暴風対策と屋敷

一休みしたら早速、村の中を散策してみる気になった。村は平成十二年に、文化財保護法に則って、文化庁から重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

下のイラスト地図は村の観光協会からいただいたものである。地図の下部中央やや左にフェリーターミナルや役場がある。そこを起点とするように集落が広がっている。集落のほぼ真ん中を道幅約二間の白砂の道が反対



側の海岸のあがり浜まで通っていて、徒歩で約十分である。誰が名付けたのか知らないが、「1号線」と明記されている。私の泊まっているふくぎ屋は集落のほぼ中心にある。

重要伝統的構造物群保存地区は文化庁によれば「白砂の街路に沿って彫り込みの屋敷地が広がり、周囲の石垣やフクギ林に囲まれた赤瓦屋根の主屋などが良く残り、地域的特徴を顕著に示す」ことから選ばれた。

宿泊しているふくぎ屋から一歩外に出ると、立派なフクギの並木があった。フクギは、直立した幹に分厚い葉が密集し、縦長の樹形が特徴的だ。家を台風の強風から守るために屋敷の周囲に植えられた。

防風効果を高めるために二列から多いところで五列にも植えられている。並木をよく見ると、太い木と細い木が混じっていることから、補植がつねに行われていることが想像できる。木の高さは四から五メートルであり、家の屋根より高い。フクギの効用は暴風だけではない。この並木のように空を覆うほどになれば、木陰を造り、夏の暑さを和らげてくれる。

白砂の道にも注目してほしい。村の人たちが毎年、海岸から運ん



白砂の道とフクギの並木



村はフクギの並木に包まれている

で来て、道に撒くのだ。村中の小路はどこもきれいで、落ち葉も落ちていない。

渡名喜村には大正時代から続く伝統として、子供たちの「朝起き会」がある。月、水、金の週三回、

朝六時半に学校に集まり、ラジオ体操をした後、子供たちは村の小路の清掃をする。かつては子供たちと先生だけだったが、最近の少子化で大人も混じって行うようになった。

所々にきれいなホウキ目も見られる。この島には猛毒を持つハブ



子供たちによる朝の清掃活動

がいることから、ホウキ目をつけてハブが這った後が分かるようにした名残だという。優雅な伝統ではないか。

フクギはちょっと高いところから眺めると、まるで村全体を覆っているように見える。緑のフクギと赤瓦がよくマッチしている。

暴風対策はフクギの植生だけではない。家を建てる時はできるだけ屋敷の土砂を掘り出して、周囲の道路より低い位置に建てた。

これには労力と費用がかかるため、深いところに家を建てるほど「ハタラチー(働き者)」として称賛されたという。

掘り出した砂は母屋のまわりに積む必要があり、内石垣で砂が崩れないようにした。道路側には外石垣を積んで、その間に掘った砂

村で掘り込みが一番深い家



を詰めてフクギを植えたわけだ。写真の家は海岸から近いこともあって、南側の道路より一・五メートル近く掘り下げたところに家が建っている。道路から敷地へは急な坂になって、手すりが必要なほどだ。

こんなに掘り下げた敷地に家を建てる時、大雨の時に水がたまる

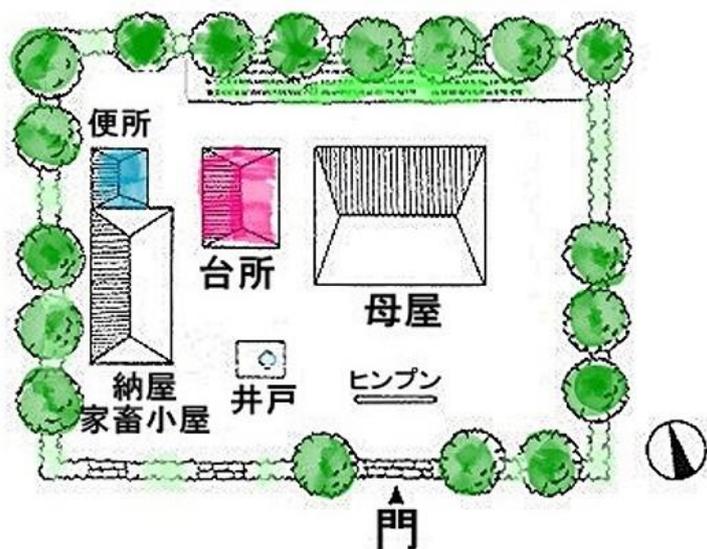
て浸水しないか心配である。何人かの村人に聞いたところ口をそろ



えて、この土地は厚い砂地層でできており、水はけが良く、いくら大雨でも水がすぐに引いてしまうから心配ないと答えた。

渡名喜村の典型的な敷地の間取りを図に示した。

門は南側に造るのが一番良いと



されているので、道路が敷地の南側にある場合は、必ず南側に門がくる。門と母屋の間にあるヒンブンは、道路からの視線を遮る衝立のようなものである。その呼称は中国語の屏風（ピンブン）に由来しているという。上の写真の家ではコンクリートブロックのヒンブンになっているが、古いものはサンゴ石灰岩でできている。

住居内部のプライバシーを保護するほかに、台風時の防風効果や悪霊が入り込まないようにする効果もあるのだという。両脇に隙間があるが悪霊は入ってこないのかと村人に聞いてみると、悪霊はまっすぐにしか歩けないから大丈夫なのだそうだ。

母屋の南側には縁側がある。平均気温二十三度のこの島では、縁

側は一年中、家族や友人たちとの憩いの場である。そして、私の泊まっているふくぎ屋のところでも述べたように、母屋の出入りは縁側から行われる。

台所は必ず母屋の西側に造られる。私の泊まっているふくぎ屋では母屋と台所が一体になっていたが、かまどで薪を燃やした時代は火事の心配から一般的には別棟にしたものと考えられる。

井戸はほとんどの家に見られた。琉球王朝時代から大正時代にかけて村には五か所のムラガー（共同井戸）しかなかった。各家に井戸が普及したのは昭和十年代になってからだという。

しかし井戸は、現在はあまり使われていない。昭和六一年度に海水淡水化施設が完成し、良質で安

定した生活用水が確保されたからだ。井戸の水を庭木に散水している人を見かけたが、多くの井戸はくみ上げ用のモーターが取り外され、使用不能になっていた。

便所は臭気の問題や糞尿を肥料や豚の餌として利用するため、やはり母屋と別棟に建てられた。家畜小屋が西の端にあるが、かつてこの村は養豚が盛んだった。いまは豚を飼う人はいなくなったが、私が泊っているふくぎ屋の敷地の西側には、かつて豚を飼った囲いが残っている。

屋敷を囲んでいる石垣は、かつてはサンゴ石灰岩を野積みしたものだだった。しかし昭和四十七年からの道路拡張工事と生活排水溝の設置工事のため石垣のほとんどがコンクリートブロックに積み替え

られた。

下の写真を見てほしい。右側の塀は昔ながらの石灰岩の石垣であ



豚が飼われていた跡



サンゴ石灰岩の石垣はコンクリートブロックに変えられた

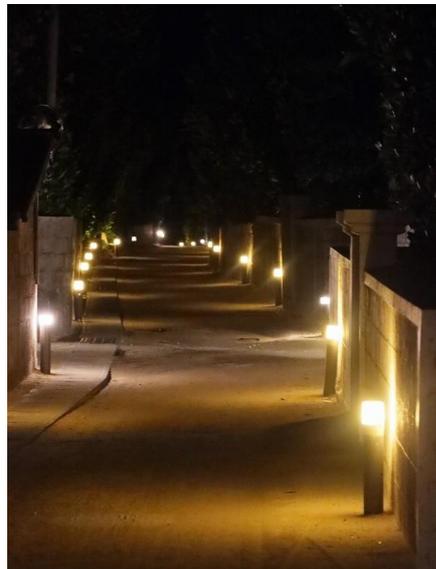
る。それに対し左側の塀はコンクリートブロックの塀に置き換わっている。小路の左側には排水溝が

見える。

テーブル石灰岩の石垣が激減したのはさみしい。フクギ並木の小路の美しさは半減したといってもいいだろう。しかし村の人の話では、建設して約五十年たって老朽化が進み、建て直しの時期に来ているので、再びサンゴ石灰岩の塀に戻す構想があるようである。石垣は白砂の街路と共に重要伝統的構造物群保存地区の構成要素である。石垣が野積みの石灰岩だったらもっといいのと思った時がある。

日が暮れると村役場の前からあがり浜まで、およそ長さ八百メートルほどの村道に沿って設置された百五十基ほどのフットライトが灯るのだ。村をつらぬく白砂の小路は、静寂で柔らかなひかりの道

になる。思わず息を呑むような、幻想的な風景がひろがる。



カツオ漁と赤瓦の屋根

重要伝統的構造物群保存地区としての一非常重要的構成要素はもちろん赤瓦の屋根を持つ家並みである。

この赤瓦の屋根を持つ家がいっごろからこの島に普及したのか知りたくなった。村人を見つけるたびに、質問をぶっつけていると、

歴史民俗資料館へ行けと言われた。

村には人口三百人にしては立派すぎるほどの歴史民俗資料館がある。資料館でガイドを務める比嘉則雄さんに相談すると「渡名喜村史」を勧められた。昭和五十八年刊行、上下二冊、厚さ十センチ以上もある力作である。以下の記述は、この村史によるところが大きい。

まず、かつては身分によって建築材料や家屋の規模などが制限されていたことをわたしは初めて知った。赤瓦はおもに首里城をはじめ



資料館の説明員・比嘉則雄さん

めとする王府・役所の建物や貴族の住宅で使われ、庶民は使用が禁止されていたのだ。

琉球王国時代の一六九一年（元禄四年）に定められた瓦葺禁止令は明治の廃藩置県まで続いた。制限は屋根だけではなく屋敷や家屋の大きさにまで及んでいた。

身分による制限が解除されたのは明治二十二年。ただし禁止令が解かれたとはいえ、瓦屋根はまだ高価であったため、ほとんどの住宅はかやぶき屋根のままだった。

島の人々は日々の暮らしを切り詰めて瓦葺屋根の家を建てようとした。茅葺の屋根は暴風雨で簡単に壊されることが多かっただろう。暴風雨でも倒れない瓦葺の家を建築することは島の人々の大きな夢だった。

けして豊かな村ではない。人々は十年、二十年計画で辛抱強く取り組んだ。稼いだ金のほとんどは建築材料につき込んだという。年ごとに柱や瓦などの建築材料を少しずつ買い足していった。

琉球王国時代から明治・大正と島の男たちは山原（やんばる）船

という近海用の小型の船で奄美大島や先島との交易に従事していた。女たちは子供を育てながら、段々



畑を耕し、芋を植え、豚や牛を飼って家計を支えた。

カツオ漁が始まったのは明治三十九年。明治末から大正初期にかけてカツオ漁業が盛んになり村は以前に比べると少しはうるおったのだろう。鰹節の製造も盛んに行われ、他の漁場から上がるものより一回り大きかったため、渡名喜節として高値が付いた。

島の人たちは沖縄本島から瓦をはじめとする建築材料を購入し、明治末には家屋の約半分が、大正中期にはほとんどの家が瓦屋根になったという。

渡名喜村役場のホームページに村の歴史を紹介したページがある。少し長いが引用しよう。

「渡名喜で近海鰹漁業が始まったのは明治39年です。大正中期には



鰹節製造に従事する男たち

最盛期を迎え、村の基幹産業となり順調な発展をみせました。

しかし、大正末期から昭和初期にかけて鰹節と豚の価格が大暴落し村の経済は大きな打撃を受けました。そのため昭和初期には、島の多くの男手が当時日本の信託統治領であったミクロネシアで鰹漁の漁夫として働き島に送金するよ

うになり、その当時、渡名喜村の現金収入の大部分は南洋からの送金でした」

村の赤瓦の家は島の人たちの血と汗と涙の結晶なのである。幸いなことに渡名喜島は日本軍の基地がなかったために、第二次世界大戦で戦火をほとんど浴びなかった。



屋根にシーサーを飾る家もある

戦後も観光開発が進まなかったため、大正時代中ごろに形成された伝統的な家屋や町並みが奇跡的にそのまま残ったのだ。沖縄本島の赤瓦建築は、沖縄戦の影響でそのほとんどが失われてしまった。

しかし伝統的な景観を維持することは容易ではない。住民の居住環境を改善したいという願いを無視するわけにはいかない。村中を少し歩いただけで、鉄筋コンクリートの家がかかり目に付いた。おそらく三割以上の家が鉄筋コンクリートの家に置き換わっているのではないだろうか。村が伝統的集落に指定されたのは平成十二年だ。村の建築規制の条例が施行される前に建てられたものである。村はいま集落の景観を守るために「渡名喜村景観むらづくり計

画」と「渡名喜村景観むらづくり条例」を策定し、外部からの土地買収や開発から島を守るとともに、集落内の白い砂道を残し、家屋には伝統的集落景観に調和するよう琉球赤瓦葺寄棟屋根をかみならせざるようなルールづくりを進めている。何十年たっても、集落景観が保存されて、むしろ「昔に戻っている」景観づくりを目指すことが島の考えになっている。

島の祭祀

村は一時間もあれば端から端まで見て回れる。細い道を右へ左へと歩きながら、あることに気がついた。本土の普通の村や町では必ずあるものがないのである。例えば山梨県の旧芦川村（現在は笛吹市に合併）は人口五百人ほどの小



里御獄への登り口

さな村だが、複数のそれがある。それは寺と神社である。寺は二か所、神社は上芦川諏訪神社、鶯宿諏訪神社、蚕影神社、白髭神社と四か所もある。

ところが村の中をスミからスミまで歩いてても神社らしきものも寺らしきものもみあたらない。ところが村のはずれでそれらしきものを発見した。セページのイラスト地図を見てほしい。中央やや左よりの上部に「里御獄」という場所があり、徒歩十五分と書いてある。かなりの急坂でしばらくためらっ



展望台からあがり浜を望む

たが、村の重要な祭祀が行われる場所だという案内板の説明を見て登ってみる気になった。登るにつれてすばらしい展望が開けてきた。



展望台から村中を望む

写真はあがり浜と呼ばれる、島の港と反対側の海岸である。かなりの遠浅で、サンゴ礁で波が白く砕けているのが見える。ひとの気配



シマノーシが執り行われるサトダウン

はまったくくない。フクギに覆われた村も見下ろせる。吹き出す汗をぬぐいながら三十分かけて小高い丘の上の平らな場

所に出た。「里御嶽」である。地元の人たちは「サトダウン」と呼んでいるようである。神社の入口にあるような鳥居はない。

神社の拝殿と呼ぶには小さいが祠（ほこら）と呼ぶには大きいような建物が二つあった。手前がサトダウン、左奥がヒヌカン（火の神）の社である。サトダウンの屋根は神社のように神明造り風になっている。

観音開きの扉は二重の門で閉められており、石が二つ立てかけてあった。この石は沖繩地方でよくみられる魔物の侵入を防ぐ魔よけの石敢當（いしがんとう）なのだろうか。扉を開けて中を覗いてみたかったが、バチが当たると怖いのでやめておいた。

このような建物は昭和の初めご



シマノーシ祭祀の様子

に初めて建てられたものであり、それ以前はただの広場だったと考えられている。

村にはサトダウンのほか、クビリドダウン、ニシバラドダウン、ウエグニドダウンという聖なる拝所があるが、このサトダウンが村一番の祭祀の場所だという。ここでは

シマノーシ（島なおし）という祭りが隔年で執りおこなわれる。

シマノーシに関しては「渡名喜村史」に地元の比嘉松吉さん（故人）による詳細な記録が残されていた。以下、資料館の展示やガイドの比嘉則雄さんの話を交えて、この島で二年に一度行われるシマノーシ（島なおし）という祭りを簡単に紹介しよう。

シマノーシは海の彼方のニライカナイ（理想郷）から神々をお迎えし、島民の安全と繁栄、そして豊年などを祈願し、最後に海の彼方に見送るといふ祭りだ。島を祓い清め、島に新しい力を充満させる訳だ。三百年以上の歴史がある。

祭りを執り行うのはカミンチュ（神人）と呼ばれる白装束の女性たちだ。このカミンチュになるに

は古くからの血統と霊力が必要だ。カミンチュの中で一番格式が高い人がノロと呼ばれるが、比嘉則雄さんのお母さん（故人）はノロだったという。写真で太鼓を持ち先頭を歩いているのがノロである。



カミンチュ（神女）たちが村を回る

ノロだけは蔓草で編んだ聖なる冠をかぶっている。白装束の女性六人が、太鼓を打ち鳴らして集落内を歩くと、神秘的な雰囲気になれるそうだ。

カミンチュは村内の四つのダウンを一日一ダウンずつ四日間かけて周る。島の各家は必ずどれかのダウンに所属しており、ダウンの前でお迎えした神を神人共食でもてなす。

左奥の赤瓦の屋根の社は火の神（ヒヌカン）をまつたものである。沖縄ではなじみの深い神様である。こちらは扉が開いており、中に入れたので覗いてみた。

長細い石が三つ並べられているが、これが火の神（ヒヌカン）の依り代である。石が三角に配置されているのは、鍋をかけるカネエ



村の小路の脇にあった小さなヒヌカン
を

の足を象徴しているのではないだろうか。真ん中に灰が入った香炉が置いてある。手前にあるU字型の瓦のようなものは供物を乗せる器のようなものではないだろうか。ヒヌカンは第一義的には火の神であり家を守る神であるが、ニライカナイや遠方の神との繋ぎの役割も果たしているといわれる。

折口信夫は沖縄の神の根本観念



台所のヒヌカン

「おとほし」にあるとした。「おとほし」は「お通し」である。カナエ状の石や香炉を神体とみなすのではなく、それらを通して遠く隔たったところの神を拝むという意味である。ヒヌカンをまつるのは女性だけであり、母から娘に受け継がれていく。

ヒヌカンは村の中のダウンにも、各家の台所にも祀られている。村を散歩中に出会った女性の家のヒヌカンを見せてもらったが、ヒヌ

カンはガスコンロの上の棚に祀られていた。

本土の神社は明治時代に近代天皇制国家がつくりだした国教制度のもとで、天皇の祖先神である天照大神を頂点とする記紀神話の神々に統合された。皇室崇拜にかわる神々を崇敬し、民俗信仰を抑圧して宗教生活の統合をはかろうとしたのだ。

村の各地で祀られていた自然神は邪神として葬られた。しかし渡名喜島では、辺境ということもあって中央の威令は徹底されず、島の神は生き延びることができたのだろう。

これは仏教に関しても同じだ。沖縄には檀家制度がない。日蓮宗や浄土宗などの寺は島にはないし僧侶もない。本土で檀家制度が

成立した江戸時代に、沖縄は独自の文化を持った琉球王国だったから、仏教教団は容易に入り込めなかったのだろう。

しかし渡名喜島でも仏壇はある。というより作り付けの仏壇がない家はないように思われる。散歩の



仏壇。風車は長寿のお祝い



途中で出会った女性の家の仏壇を見せてもらった。女性の座っている奥にあるのが仏壇である。仏像もないし、チーンとたたくりンもない。典型的な本土の仏壇とは趣を異にしている。

真ん中に見える位牌のようなものは「トートローメー」と呼ばれる。「トートローメー」は「尊い君」を意味するのだという。故人の靈魂が宿る御霊代であることに変わりはないが、沖縄では家族が亡くなって七代目になると家を守るカミになると考えられており、仏教的

な位牌と意味が違う。わたしが受けた印象では仏教というより、祖先崇拜の色彩が強い中国の儒教に近い。

わたしは渡名喜島に来て、本土とは違った風習や文化に触れることができた。高級なりゾートホテルのプールで遊び、かりゆしウェアに身を包み、夜の街で酒を飲み歩くような沖縄の旅では知り得ないことだ。人とのふれあいこそが旅の醍醐味なのだが、多くの方に話を聞き、理解を深めることができた。

限界集落

村をぶらぶら歩いていたら、フェリーを降りた港の前にひょっこり出た。港周辺にはフェリー乗降客のためのターミナル、観光協会、

役場、漁業組合、診療所、警察官の駐在所などが固まってある。観光協会を訪ねれば、何か面白い話を聞くことができるかもしれないと扉を開けてみた。

村の観光協会は平成三十年に設立されたばかりだという。観光地化されていないことをウリにしていた渡名喜村も、少しは観光客を呼ぼうという気が起ったのかもしれない。職員の三箇（さんが）恵介さんに話を聞くことができた。「村の出身の方ですか」

「いや、私は静岡にいたんですが、定年退職した後にハローワークで観光協会が職員を募集していることを知り、応募したんです。海が好きで沖縄には若い頃からよく来ていましたから抵抗はなかったですね。給料は安いですけどね」

三箇さんは給与よりも暖かい気候と豊かな自然に魅力を感じたのだろう。村営の共同住宅に単身赴任で暮らしているという。

「協会は観光業を発展させるために設立されたと、観光だよりにあります。お客は増えましたか」
「なかなかおびやかしいですね。夏のピークでも一日二十人程度です。年間を通じて千人から千五百人というところですかね」

「ネットで見たんですが、泊まる場所もあまりありませんね。昼食が食べられる食堂もない」
「村の人たちは、土地や家を貸したり売ったりすることを好みます。若い人たちは島の外へ出て行ってしまいますから、観光を担う人も育たない」

美しい自然景観やのんびりとし



観光協会・三箇恵介さん

た時間が流れる集落のたたずまいがこの島のウリなのだ。渡名喜島は観光県沖縄にありながら、観光化から取り残されたかのように見える。

確かにこの島にたくさん観光客が押し寄せたら、村の人たちの

生活は脅かされるかもしれない。渡名喜島には公設キャンプ場もなく、島内全域でキャンプを禁止しているから、十組ほどが訪れるだけで村の宿泊能力をオーバーしてしまう。持続可能な観光開発を目指すなら、宿泊施設を増やさないことも身の程を知った賢いやり方といえるのかもしれない。

しかし、と思う。これで村の存在が持続可能なのだろうか。三箇さんに、現在の村の人口を聞いてみたが、役場で聞いた方が正確なことが分かるだろうと案内してくれた。

役場の正面入り口を入ったすぐ左手の壁に昨年末現在の人口が掲げられていた。それによると、世帯数が二百三戸、男性人口百七十八人、女性人口百二十一人である。

本籍・人口・世帯数 令和5年2月末現在	
本籍数	(-1戸) 477戸
本籍人口数	(-3人) 1,044人
住民基本台帳に基く人口	
男	(-1人) 178人
女	(-2人) 121人
計	(-3人) 299人
住民基本台帳に基く世帯数	(+0戸) 203戸

役場の掲示板。ついに人口300人割れ

合計二百九十九人で、ついに三百人の大台を割ってしまった。村役場職員の宮里紀夫さん(仮名)に聞いてみると実際にはもっと少ないだろうという。

「住民基本台帳による数ですので、住民登録を残したまま本島で仕事

に就いたり、病院へ入院したりしている人がいます」

「男女の人口が不自然なほどアンバランスですね。原因は分かりますか」

宮里さんは首をかしげながら、実態はよく分からないが、女性の方が島を出て行きやすいからではないかと言う。男はいろいろなしがらみがあるから動きにくいということなのだろうか。

「わたしはいまふくぎ屋に泊まっています、ここへ歩いてくる途中、かなりの数の空き家がありました。役場では把握していますか」

「村でいま把握している空き家の数は約八十戸です」

全戸数の約三割が空き家だというのは、かなりショックな数字である。六十五歳以上の高齢化

率も四十七パーセントだという。高齢化率が五十パーセントを超えた集落を「限界集落」という。大野晃という社会学者が一九九〇年代に提唱した概念である。共同体の機能維持が限界に達し、やがて消滅の道をたどるしかないという意味で「限界」なのだ。

例えば、いくら高齢化が進んで要介護老人が増えても、それを支える働き手が確保できない。採算が合わず商店がなくなるから村の外まで買い物に行かなければならない。若者は働き口を求めて出て行き、跡継ぎの確保が難しくなるなど負のスパイラルに陥ってしまうのだ。

わたしは海に囲まれたこの村に来て、おいしい魚をふんだんに食べられると期待した。しかし村に

は鮮魚を扱う魚屋がない。だから村人が魚を食べるのには、自分で釣ってくるか、漁師から直接分けてもらおうしかない。多様な地魚を期待していたが、フクギ屋で毎日夕食に出されるのは、カツオの刺身だけだった。

漁港で出会った漁師の上原雅志



漁師の上原雅志さん（前教育長）

さんに聞いたところ、捕った魚は漁港にある製氷施設で氷付けにし、翌日の午前中にコンテナで那覇の泊港に運ばれるという。島には市場も魚屋もないから、島の内部では魚は流通しない。

商店は一軒だけ店を開けていたが、扱っているのは日常生活雑貨や保存が利く食品だけ。鮮魚や果物や生肉などはない。高校がないから若者は親戚や兄弟を頼って島外の高校へ通う。島へ帰っても働き口がないから、島へは戻らない。

さらにこれだけきれいな海がありながら、マリンアクティビティ事業者が一社もない。ダイビング愛好家には有名らしいが、那覇から船で島のダイビングスポットにきて、島には立ち寄り帰って

ゆく。近隣の慶良間諸島が観光で盛んなのとは対照的だ。

村のホームページの中に、平成二十二年までの人口の推移を示したグラフがある。人口は昭和二十五年に一六〇一人とピークに達している。その後、年々減少を続け

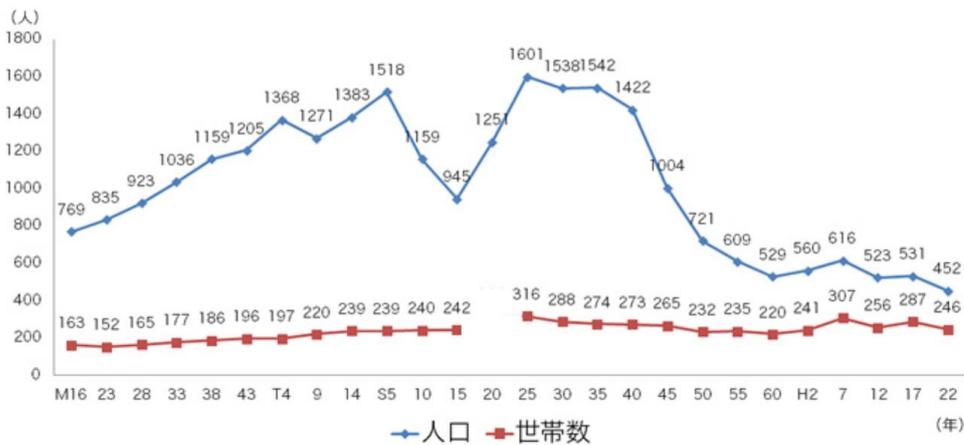


村で唯一営業中の桃原商店

昭和四〇年の一四二二人から昭和五〇年の七二一人まで一〇年間で坂を転げ落ちるように半減するに至った。この時期は日本の高度経済成長期にあたる。島の人々は豊かな暮らしを夢見て、島を去っていったのだろう。現在はピーク時の二割にも満たない。

村ではこの現状をどう考えているのだろうか。伝統的建造物も伝統的風習もこのままでは近い将来消滅してしまうのではなからうか。若い宮里さんに疑問をぶっつけてみたが、黙って首を横に振るばかりだった。

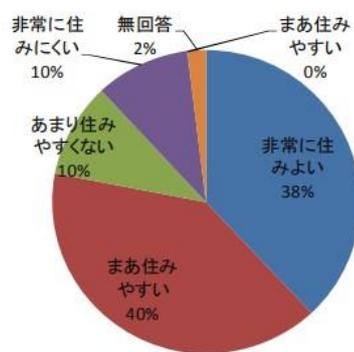
この村の年間の一般会計予算は約十二億だという。村民一人あたりに使われた税金は約四百万円にもなる。これはおそらくわたしが住んでいる町に比べると一桁多い



数字だと思う。だから村の人たちは恵まれていると思う。

村には沖縄電力のディーゼル発

渡名喜島民の住みやすさ感



電所があり、海水淡水化の水道もある。幼小中を兼ねた冷暖房・騒音防止装置付きの学校もあるし、医師と看護師が常駐する診療所や警察官が常駐する駐在所もある。立派な歴史民俗資料館があり、デイスタービス施設がある。だからいまはよい。

渡名喜村の住民に「住みやすさ感」を尋ねたアンケートがある。「非常に住みよい」と「まあ住み

安い」を合わせると78パーセントにもなる。この結果を見ると、ほとんどの住民がいまの暮らしに満足しているのだ。

年間の欠航が三十日あっても、台風の際に一週間も欠航が続いても、一週間に一便しか船が来なかった昔のことを思えばなんのことはない。住めば都というわけだ。

問題は将来だ。しかもそれは遠い未来の話ではなく、すぐそこに迫っている危機なのではないだろうか。幼小中学校の子供の数は約三十人弱だという。将来の村の人口は子供の数で決まる。限界はすぐそこにきているような気がする。村のキャッチフレーズである「何もしないことができる島」はわたしのような年寄りにとっては結構な話だ。しかし若い者はそう

はいかない。生活費を稼げなければならぬし、子供も育てなくてはならない。

いまこそ渡名喜島のフューチャーデザインが必要だ。フーチャーデザインとは、様々な課題に対し現役世代だけでなく、その課題の影響が及ぶ将来世代の立場も踏まえて議論しようという取組みである。老人たちは将来のことを気にしなくてもいい。いまの生活が満ち足りていればそれで満足だ。二十年も三十年も先のことを心配しても仕方がない。

村の村長と六人いる村議会議員の平均年齢は六十六歳である。議会ではこの深刻な事態について対策が議論されているのだろうか。村人に言わせると年間二週間程度しか開かれない村会議員の報酬は

日割りにすると国会議員より高いことになるそうである。

次の世代を担う若者が島に定着しないことには話にならない。私が村長だったら思い切って、Ｕターンしてくる若者や移住してくる若者に奨励金を出す。村の一人当りの年間予算の四百万円。これを十年間出す。島に残って漁師になった若者にももちろん出す。

島を訪れる観光客に一人一泊一万円の島だけで使えるクーポン券を出す。それを使える店を村で作って、移住してきた若者に任せる。魚屋は必須だ。

よそ者が勝手なことを言うとお叱りを受けそうだが、いずれにしても思い切った手を打たないかぎり限界は来る。ぬるま湯につかっている場合ではない。

島を去る最後の日に、ふくぎ屋

の社長、南風原さんが船の出るまでの時間を利用して、軽自動車での周遊道路を一周してくれた。

島を回る道路は総延長でおよそ十二キロメートル。車で走ればあっという間だ。今まであまり島の景観に触れてこなかったので、最後に美しい海をご覧いただく。

島の最高標高は大岳の一七九メートルである。周遊道路はその大



岳を巻くように島を一周している。

南風原さんが最初に向かったのは港の反対側にあるあがり浜。七百米メートルに渡って続く白い砂浜と遠浅で静かな海は眺めるだけで癒される。この浜は島の住民総出



で行われる水上運動会の舞台でもある。

水上運動会は百年も前から行われている島の伝統行事だ。カツオ漁の餌として利用するキビナゴを捕るためには海に潜らなければならぬ。子供たちが海に慣れるように始められたそうだ。

そしてあがり浜の南に続くアンジェーラの浜は二〇〇九年公開の長澤まさみ演じる映画「群青」の舞台になった所である。ダイビングスポットやウミガメの産卵が見られる場所として知られる美しい海をバックにラブストーリーが展開される。

島の西海岸にあるのが呼子浜（ゆぶく浜）。近くにある入砂島の神様が海を渡ってくるといわれている神聖な場所だ。砂浜のすぐ



ゆぶく浜と神の宿る岩

近くにある黒っぽい岩は神の宿る岩。手前の白い岩はこの島で最初に隆起した二畳紀の岩といわれる。南風原さんは「この辺の浜ではウミガメが海面から顔を現すところが見られるんですが・・・」と言って、目を細めながら海の方を眺めている。

南風原さんは「あそこにウミガメの背中が見えます」と海の方を指さすのだが、目の悪いわたしには群青色の海面しか見えない。クジラが潮を吹きながら沖を通ることも珍しいことではないという。たしかに渡名喜島には美しい自然とゆったりしたときの流れがある。観光客が押し寄せて自然が破壊されたり、島の人の生活が脅かされたりするようなことがあってはならない。その上で、なんとか村の存続を図ることができないものだろうか。渡名喜島が一戸もない戸無き島にならないように切に願う。

令和六年二月十日

Fujizakura